

編集室

電子カルテは命の灯

今年になってもう一ヶ月経ってしまった。それにしても去る2018年はほんとに「災」の一年であった。わが診療所のある三原では断水が1週間以上続いて本当に「往生こき」しました。しかし、断水をはるかに上回る「災」は停電であったろう。9月には北海道で地震があり、停電で住民の生活が何週間も麻痺していた。

本当にちょっと想像しただけでも停電は困る。何日も続いたら家庭生活も社会生活も崩壊してしまう。しかし裏を返せば、その電気を数秒間も途切れぬよう供給し続けなければ立ち行かない人類の運命は、いったいどうなっているのだろうかと思う。

例えば、いわゆる「システム」、もっともシンプルな形でも書類。これらはもう大半が電子データである。チップの中に2進法の0か1が一時的にたまっているだけだ。人間の脳の記憶とまったく同じで、死んでしまえば、つまり電気が途切れれば何も残らない。そうするとわれわれの歴史ってどのように残されていくのだろうかかと心配になる。古代の歴史は口ゼッタストーンとか、奈良時代の木簡とか、いろいろなものが「出土」して過去を伺い知ることができた(なぜ昔のものは決まって土の中に埋まってしまうのかも私にとっての謎の一つだが)。ところが1000年先に死んだパソコンが出土したって、今の暮らしを何一つ語らない。

そう思っていたけど、はて、私が昭和30年代に生まれてから50数年、電気の途切れた時間が総計何日、いや何時間あったろうか? そう考えた時、ハッと気がついた。きっとわれわれ人類はこの先何千年と電気の供給を絶やすことなく、電子データを守り続けていくのだ。クラウドとかバックアップとか工夫しながら。お寺の聖火を守るように電気の火を維持していくのに違いない!

そうなると現代の歴史は未来において分からなくなるどころか、デジタルデータで残っていく。例えばリアルな映像が1000年先に見られるのだ。考えてみれば明治あたりからは写真や映像が残っているではないか。フィルムや磁気データは劣化するけどハードディスクのデータは生き続ける。西暦3000年には家庭のパソコンで西暦2000年台の映画をダウンロードして見たりしているのだろうか。

なんて、たわごとを考えていた矢先、現実に引き戻された。電子カルテである。「サーバーやハードの更新の時期が来ました」と営業のお兄さんが申し訳なさそうに言う。5年ごとに200万円! …だが、すべての患者情報を収納した電子カルテこそわがクリニックの命の灯であるから、これを絶やすわけにはいかない。電子データの維持の土台は、結局、金、あるいは経済なのであった。

(小園 亮次)

広島県医師会速報 2019年(平成31年)2月15日

- 発行所/一般社団法人 広島県医師会 〒732-0057 広島市東区二葉の里三丁目2番3号 TEL 082-568-1511 FAX 082-568-2112
広島県医師会HP <http://www.hiroshima.med.or.jp/> E-mail: kouhou@hiroshima.med.or.jp
- 編集者/広島県医師会会長 平松 恵一
(広報委員)山中 祐介、小園 亮次、加世田ゆみ子、片山 紀彦、小山 祐介、隅田 昌之、田中 民江
谷 充理、津田 敏孝、檜山 桂子、吉田 良順、桑原 正雄、岩崎 泰政、藤井 康史
- 印刷所/レタープレス株式会社 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809番地の5 TEL 082-844-7500 FAX 082-844-7800